様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２８４２

研究課題名（和文）アジア圏多国籍英語クラスにおけるリーディングとライティング授業の課題克服型教授法

研究課題名（英文）An Approach to Motivational and Academic Challenges in Plurilingual EFL Classes in an EFL Environment Countries: For Classes of Reading and Writing in English

研究代表者
鈴木　章能（SUZUKI, Akiyoshi）

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：７０３５０７３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：アジアの複数の非英語圏地域の留学生と日本人学生が混在する英語の授業が日本中の大学で増えつつあるが、多国籍クラスの同授業運営には解決すべき難しい課題がある。この課題を克服する工夫として、(1)「今後、なる可能性のある自己」「ならざるを得ない自己」を直視させる、(2)「遠い」将来のことと同時に「いま」のことにも関心をもって学習に没頭できるように「アイスブレイク」を行う、(3)英語を絵で理解させる、(4)リーディングでは行為連鎖（action chain）を実際の絵によって示すという方法、ライティングでは行為連鎖の絵を自ら構築するという方法を用いる、というものが効果的であるという結論に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
(1) 多国籍クラスの英語授業の運営に困っている教員、ならびに同クラスに属する学生たちの英語力向上に資するものになる。(2) 英語授業はもちろん、他の科目における多国籍クラスを担当する教員や受講学生にも寄与できる。(3) 本研究の方法は日中台韓以外の国籍から成る多国籍クラスの授業の課題克服にも応用できる。(4) 国際化が進む日本の大学では多国籍クラスが益々増加すると考えられる。日本の多国籍クラスにおける教育の課題が解決し、海外からも評判が上がれば、益々の国際化が期待できる。(5) 国外に成果を発表すれば、同様の課題に突き当たっている世界の教育にも寄与できる。

研究成果の概要（英文）：On campuses all over Japan, the number of plurilingual classes comprising students from Japan and other Asian countries has been increasing. In Japan, a class in English reading and writing is a prerequisite for students from other countries as well as for Japanese students. Teachers of these classes need to improve students' abilities to accurately read and write in English. However, this is easy for neither teachers who are native speakers of English, nor for native Japanese-speaking teachers. For an effective pedagogy to address these issues:(1) teachers should encourage leaners by showing concrete examples of what they can be, or their possible selves, and what they should be, or unavoidable possible L2 selves;(2) teachers should let students learn English for icebreaking, emphasizing and understanding each other;(3) for doing that in correct English, teachers should make students understand English as picture;(4) for that, teachers should use "action-chain" reading and writing.

研究分野：英語教育学、比較文学・文化

キーワード：多国籍クラス　外国語としての英語教育　リーディング　ライティング　グローバリゼーション　世界市民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在日本の大学には多くの留学生が在籍している。非英語圏からの留学生と日本人が一緒に英語の授業を受講することも少なくない。アジアの数カ国の非英語圏の学生が混在することもある。この多国籍クラスの英語の授業、とくにリーディングとライティングの授業では、教授の方法について対応すべき以下のような課題に直面している教育機関が少なくない。

(1) リーディングやライティングの授業では英語を正確に読み、書く力を向上させるために、学生の誤解や知らないことを説明する必要がある。この説明において、主に以下のような課題がある。

① 説明に用いる言語の問題。留学生は一定以上の日本語能力を証明する試験を受けて日本に来ているはずなのだが、一部の大学を除き、日本語の拙い留学生が多く存在する。この場合は英語で説明する方法があるのだが、現実的には英語も拙く、英語でも日本語でも説明を理解することが困難な留学生がいる。一方で、地域によっては日本語こそ拙いものの英語の会話力が十分な留学生がいる。だが、多国籍クラスの授業では、英語で説明すると説明内容があまり理解できない他の地域の留学生ならびに日本人学生がいる。

② モチベーションの問題。上記の①のことに関連して、語学力が低い学生の語学学習のモチベーションはあまり高くない傾向にある。いかに英語の学びを自分のためになる学びとして考えさせられるのかという課題がある。

(2) 上記(1)の①と②の課題は、多様な教育文化を巡る知識の課題にも関係する。多国籍クラスでは、様々な地域の教育的背景を背負った学生たちが授業に参加している。日本人学生が大学入学前までに受けてきた教育を前提にして英語の授業を行うとき、留学生たちは戸惑う場合も少なくない。したがって、教師は非英語圏における高校までの英語教育について具体的に把握した上で授業を展開する必要がある。「具体的な把握」とは英語学習の開始時や英語教育のカリキュラムはもちろん、文化的に異なる情緒的反応も含まれる。

多国籍クラスの英語授業について日本人学生を中心に教えればよいという声も実際によく耳にするが、留学生も同じ学習者である。祖国の親御さんも日本の教育に期待しているはずだ。よい授業をして少しでも学力を上げてあげたい。そうすれば、日本の英語教育が世界から注目され、評判はいま以上にあがり、更なる留学生の増加や国際化の促進が期待できる。多国籍クラスは英語使用や多文化理解のよい機会であり、日本人学生の益にもなる。大学の国際化が叫ばれるいま、ここに指摘した課題は、いまのうちに対応しておくべき喫緊の課題と考える。

２．研究の目的

アジアの複数の非英語圏地域の留学生と日本人学生が混在する英語の授業が日本中の大学で増えつつある。リーディングとライティングの授業では正確な英語運用能力を身につけさせる必要があるが、学生の日本語と英語の語学力に格差のあることが多く、教師が授業で説明する方法(言語)をはじめ、各教育文化の違いに起因する学生の戸惑いやモチベーション等、多国籍クラスの同授業運営には解決すべき難しい課題がある。しかし、これらの課題に対応したEFL(English as a Foreign Language)の教授法は確立されていない。大学の国際化が進み多国籍クラスが増加する中、同教授法の確立は喫緊の課題である。本研究では最も多いケースである中国・台湾・韓国・日本の学生、とくに学力ならびにモチベーションがそれほど高くない学生たちが混在する EFL 環境における英語のリーディング・ライティングの効果的な教授法を確立する。

３．研究の方法

(1)モチベーションの課題を克服する工夫。(2)多様な教育文化を巡る知識の問題を克服する工夫。(3)学習方法と第一言語の影響から考える英語の不得意さの問題の解決。(4)説明に用いる言語の問題の解決。以上のことについて考察し、教授法を確立する。

４．研究成果

(1) モチベーションの課題について―地域的違いと地域を超えた類似性の視点から

日本・中国・台湾・韓国における各々の教育文化について調査し、各々の典型的な英語学習の方法ならびに教育方法や文化によって異なる英語学習への情緒的反応や学習のつまずき等を比較分析したほか、各地域の学生が日本で英語の授業を受講する際、どのようなことに戸惑ったり、どのような教授法で効果が出にくかったりするのか、各々の教育文化的要因と差異を超えた共通点を分析し、学習者の英語学習のモチベーションないしエンゲージメントの課題克服の方法を探究した。このことによって、研究の方法の(1)モチベーションの課題を克服する工夫と(2)多様な教育文化を巡る知識の問題を克服する工夫について考察を行った。

本研究で対象としたのは、語学力と学習のモチベーションが比較的低い日本・中国・台湾・韓国の学生たちだが、語学学習のつまずきとモチベーションの低さには相関関係があり、各々異なる教育文化で学習したものの、それまでの学習のつまずきによって自信が持てない、また自分にとって英語の実用性が意識できないために学習のモチベーションが低くなっているという点に共通項があることを発見した。加えて、東アジアの国々の学習者の特徴は、英語教育がいわゆる受験勉強と強い関係を持っている点、面子を強く意識する点、アジアの留学生は英語がわからないからこそ日本に留学してくる点が特徴的であることがわかった。

こうした点を踏まえて学習のモチベーションと語学力を向上させるためには、自己肯定の意識を持たせる工夫、ならびに英語が実社会でどのように必要とされるのか、すなわち「今後、なる可能性のある自己」「ならざるを得ない自己」を直視させる工夫が必要である。このことから、C. ロジャーズの Student-centered education による教育、ならびにこれまで日本人学習者を対象に構築してきた教材「E-Job100」（H21 年度～H23 年度：研究課題番号: 21520608）を用いた学習が効果的であるという仮説を立て、その効果を確認した。とくに、ロジャーズの Student-centered education は、面子が理解できないことを素直に受け入れられなくする、あるいは他人に相談できなくする東アジアの学習者にとっては、効果的であり、かつ、叱られる文化(韓国)と叱られない文化(中国・台湾)の両方に対応できる方法でもある。

(2) 学習方法と第一言語の影響から考える英語の不得意さの問題の解決

学習者がどのような間違いをする傾向にあるのかを知っておくことは有効である（Ferris, 2011）。そこで、日本、中国、台湾、韓国の学生たちの英語理解（英語の間違い）がどれくらい第一言語の影響を受けているのか考察することを行った。その方法として、①各国の学生たちに書かせて蓄積してきた英作文の分析、②石川慎一郎神戸大学教授ほかが作成したアジア人学生が書いた英語コーパスの分析を行った。①と②の方法から、いくつかの特徴が明らかになった。たとえば、中国人学生は一般の人を表す場合、we を多用する傾向がある。英語力の比較的低い学生が書く英語の主な特徴に焦点を当てると、中国と台湾の学生は中国語と同じような語順で英語を書き、統語が崩れる傾向がある。一方で日本と韓国の学生は語順こそ比較的理解しているが、「です」といった丁寧語を示す言葉のために、be 動詞を誤って用いる傾向がある。また、時制や法（とくに完了形）、前置詞、関係詞に弱点が見られる。前置詞の誤解は日本語と韓国語が助詞をもつ言語であればこそ発生するものである。加えて、助詞の存在のために、日本と韓国の学生は、自動詞と他動詞の区別をしていない場合が少なくない。更に、東アジアの学生は総じて文頭に and を多用したり、含意を無視して英単語を理解したりしていた。

もっとも、英語を不得意とする学生は総じて、類似した間違いを起こしている。これは、第一言語の問題というよりも、英語のルールそのもの（たとえば、品詞とその順序によって主部や述部などが構成されるといったルール、言い換えれば文型）をきちんと身につけていないことに起因すると考える方が妥当である。加えれば、アンケート調査を通じて、英語力が比較的低い日中台韓の学生は第一言語の「訳」を仲介させて英語を理解しようとしていることが確認できた。とくに、日韓の学生は文法を訳と結びつけて訳し上げを行う傾向にある。こうした現象は、先にも触れたとおり、入試のための英語学習によって引き起こされていると考えられる。従って、基本的な文法、特に５文型をしっかり理解させ、各文型を構成する各要素への修飾の方法を理解させ、並行しながら語用論や意味論を用いた語彙力の増強や英文の理解を、第一言語の訳を仲介せずに行っていく必要がある。加えて、上に述べた動機づけにも配慮した教授法が重要になる。

(3) 説明に用いる言語の問題の解決と世界市民の育成

英語の学力が比較的低いアジア圏の留学生と日本人の学生から構成される英語リーディングとライティングの授業において、教師の説明する言語が学生に通じない場合、どのような教授法が効果的か。正確な英語の教授では第一言語との差異を用いることが効果的であることから、また教師の説明言語の仲介を極小化する必要があることから、当初は各国の言語に翻訳された英書を用い、学習者自身に第一言語と比較させるという方法を考えていた。だが、翻訳研究を行った結果、優れた翻訳ほど原文と異なる状況を読者に思い描かせる傾向にあることを確認した。そこで考察を重ね、「理解する」ことを“I see”(見える)と言うことに着目し、リーディングについては、抽象概念ではなく具体的な事柄を意味する文を用いて、絵で理解させる方法が効果的であるという結論に至った。すなわち、いわゆる英語の意味作用の特徴でもある行為連鎖（action chain）を、実際の絵によって示すという方法である。アメリカや中国では、初修者には単語を絵で覚えることから始めるのが主流であるが、それでは時間が足らないため、また文の成り立ちを理解していない点が問題であるため、行為連鎖を示すことが有効である。

誰でも費用をかけずに行える方法として考えたのは、パワーポイントを用い、一つずつの英単語を絵でポップアップし、単語を左から右へと読み進めるに従って次第に絵が完成し、一文をマンガの１コマとして示すというものである。次の文も同様にマンガの１コマとして示す。こうすることで、日韓の学生にありがちな訳し上げを回避し、英文を左から右へ読む癖をつけ、また全体としても冠詞や関係代名詞などの文法事項が、訳ではなく、左から右へと読みつつ正しい絵を作り上げるために必要なものとして、その意味と機能が正しく理解できる。留学生は日本のアニメやマンガに興味をもって来日する者が少なくないため、この方法は留学生の学びへの集中力やモチベーションにも効果的である。

一方、ライティングの教授法もまた、行為連鎖を用いることが効果的であると考えられる。自分が述べたい単語をタイプすると、文字と同時に絵がディスプレイ上に浮かび、単語をタイプするのに応じて、絵が加わっていき、一文をタイプで打ち終えたときに、自分が言わんとした事柄が絵となって目の前に現れるようにする。こうすれば、前置詞や単語の選択や順番（文型等）の間違いによって、自分の言いたいことと異なる絵が目の前に現れるため、どこで間違えたのか学習者が気づきやすくなる。もっとも、学習者が膨大な単語から正しい単語を選択して用いるのは、英語を不得意とする学習者にはハードルが高く、学習効果も高くない。そこで、あくまでも英語

ライティングの練習ということで、限られた単語の中から選択して文を構築することで、英語の語順、意味、語法、文法を自ら学んでいけるようにすれば（そして、上記の読みの練習も併せて行うことで）、効果的な学習が期待できる。

なお、限られた単語の中から選択して作ることができる文として用意するものは、学生たちにとって身近な事柄を表す英文であるのが望ましい。Student-centered education を創設した C. ロジャーズは、学習者は、日常において身近な事柄が学びの題材となるとき、モチベーションと学習効果が最も向上することを証明した。昨今の、J. レイヴと E. ウェンガーの「状況に埋め込まれた学習」や内発と自律を勧める E. L. デシの主張も同様の論理の上にある。このことから、先に、E-job 100 を用いて「今後、なる可能性のある自己」「ならざるを得ない自己」を学生に直視させてモチベーションを向上させるという方法を提案したが、学生が「遠い」将来のことと同時に「いま」のことにも関心をもって学習に没頭できるようにするのが望ましい。そのために、たとえば、今村光章が挙げる諸々の「アイスブレイク」の方法（簡単な自己紹介から次第に互いの深い理解へと至るチームビルディングの方法）を教室内で英語によって行わせるのが効果的であると考える。様々な地域・国の出身である学生たちは互いのことに関心があるはずだ。互いの違いならびに類似点を述べ、共感し理解するための英語を口頭で述べることを目標に、まずは先に述べた単語選択による行為連鎖英語ライティングによって行わせて、英語を学ばせつつ英文を書かせる。このことによって、教師は、言語による介入を極力減らし、選択肢にあがっている単語を指で指示して示唆することで、学習者を支援することができる。学生たちは英語を、互いの理解と共感、良好な関係作りのために学ぶことになり、英語学習がグローバル世界において重要な「世界市民」になる方法にもなる。英語学習が世界平和の促進にもなる。

今後の課題は、行為連鎖英語ライティングを行うプログラムの開発である。日本には「いらすとや」というウェブアプリが存在するが（現在は閉鎖）、その英語版を作るか、もしくは、コンピュータープログラム上に名詞を命令するコマンドを置くプログラムの開発を実践することである。

＜引用文献＞

今村光章(2019)『アイスブレイク―出会いの仕掛人になる』晶文社.

Ferris, D. R. (2011) *Treatment of error: In second language student writing*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Akiyoshi Suzuki, Teresa Kuwamura	４．巻 -
２．論文標題 Academic Issues and Solution Proposal in a Plurilingual EFL Class in Japan	５．発行年 2017年
３．雑誌名 IAFOR Dubai 2017　Educating for Change　East Meets West: Innovation and Discovery	６．最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 鈴木章能	４．巻 64
２．論文標題 文体が切り開く英語の理解と世界の認識――シャーウッド・アンダソンを中心に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 文体論研究	６．最初と最後の頁 57-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Akiyoshi Suzuki, Teresa Kuwamura	４．巻 －
２．論文標題 Academic Issues and Solution Proposal in a Plurilingual EFL Class in Japan	５．発行年 2017年
３．雑誌名 The　IAFOR International Conference on Language Learning -- Dubai -- 2017 Official Conference Proceedings	６．最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Akiyoshi Suzuki	４．巻 6
２．論文標題 Counterturn-of-faith and Manifest in Translation: Haruki Murakami's Translation of Breakfast at Tiffany's	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Global Humanities and Social Sciences	６．最初と最後の頁 45-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 桑村テレサ
２．発表標題 日本大学及高校英語教学現状及問題的研究探討与分析
３．学会等名 四川大学外国語学院英語言文学英語教育研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木章能
２．発表標題 文体が切り開く英語の理解と世界の認識――シャーウッド・アンダソンを中心に
３．学会等名 日本文体論学会第111回大会　研究フォーラム「文体論と外国語教育」
４．発表年 2017年

１．発表者名 Teresa Kuwamura
２．発表標題 Approach to Issues in a Plurilingual EFL Class in Japan
３．学会等名 The 28th Annual Spokane Regional ESL Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akiyoshi Suzuki, Teresa Kuwamura
２．発表標題 Academic Issues and Solution Proposal in a Plurilingual EFL Class in Japan
３．学会等名 The IAFOR International Conference on Language Learning -- Dubai 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Teresa Kuwamura
２．発表標題 Global Trends in English Medium Instruction
３．学会等名 FD Conference of Nagoya Institute of Technology: Paradigm of English Medium Instruction and Value Innovation（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木章能
２．発表標題 言葉は心の鏡――英語をきちんと教えれば人の心をきちんと理解する力が育つ
３．学会等名 ヒューマニスティック英語教育研究会第1回会合
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akiyoshi Suzuki
２．発表標題 For Further Promotion of Empathy and Peace: The Past, Present, and Future of I-STEP
３．学会等名 I-STEP Symposium (80th Anniversary Hanyang University)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Teresa Kuwamura, Akiyoshi Suzuki	４．発行年 2017年
２．出版社 Ichiryu	５．総ページ数 64
３．書名 An Approach to Motivational and Academic Challenges in Plurilingual EFL Classes in an EFL Environment Countries: A Case of a University Class in Japan , Vol. 1. Affinities and Differences of Motivation Issues and Solution Proposal	

１．著者名 永井正司、鈴木章能、桑村テレサ	４．発行年 2020年
２．出版社 開成出版社	５．総ページ数 88
３．書名 Three-Tiered Approach to English Medium Instruction	

〔産業財産権〕

〔その他〕

E-job 100
http://e-job-100.sakura.ne.jp/modx/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	桑村　テレサ (KUWAMURA Teresa) (30639646)	京都先端科学大学・経済経営学部・准教授 (34303)	